

一丁塚15号墳

2023年3月

岡山県総社市



① T-1 及び墳丘の葺石 (西から)



② T-3二段目葺石 (東から)



① T-2・T-7 竪穴式石柵検出状況（北から）



② 墳丘南西角葺石検出状況（南西から）

はじめに

総社市は、県下三大河川の一つである高梁川が市城の中央付近を流れ、広い平野部を形成し豊かな水を供給しています。その恩恵を享受して、古代より吉備の中核地として栄え、全国的にも知られる数々の歴史遺産が存在しています。

高梁川左岸では、全国第10位の規模を誇る国指定史跡作山古墳・こうもり塚古墳・鬼城山・備中国分僧寺・備中国分尼寺など著名な遺跡が多く見受けられます。

また高梁川右岸では、高梁川に近接した秦地域で、近年前方後方墳と判明した一丁塊1号墳や、新たに発見された茶臼嶽古墳が古墳時代でも古い3世紀後半頃の前方後方墳であるということが明らかとなり、注目されています。なお、これらの古墳の周辺には、40基近い方墳・円墳が存在することも明らかになり、地元の方々の協力を得ながら、古墳群の測量を実施することができました。

その中で、一丁塊15号墳は形態的には7世紀代の古墳に類似しますが、立地的には7世紀の古墳とは異なる特異な古墳であるため、築造年代を明らかにする必要が生じ、確認調査を実施しました。

この報告書はその一丁塊15号墳の確認調査成果を記したものです。

最後になりましたが、平素から本市の文化財行政に、格別の御指導・御協力を賜っております関係諸機関及び関係者の皆様、調査に参加してくださいました皆様、そして古墳の発見を機に文化財を守り伝えていこうと、平成24年に「秦歴史遺産保存協議会」を立ち上げられ御支援くださいました皆様に記して感謝の意を表しますとともに、より一層の御指導・御支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和5（2023）年3月

岡山県総社市

例 言

1. 本報告書は、一丁坑15号墳の確認調査に伴って、総社市教育委員会が2016年1月18日～2016年6月28日まで実施した一丁坑15号墳の確認調査報告書である。
2. 一丁坑15号墳は総社市桑地内に所在する。
3. 発掘調査は総社市教育委員会文化課職員高橋進一と村田晋が担当した。
4. 本報告書の作成は、総社市観光プロジェクト課文化財係職員高橋進一と総社市埋蔵文化財学習の館職員の平井典子が担当した。なお、土器の実測は和田かほりの協力を得た。
5. 発掘調査において、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表します。

稲田 孝司，宇垣 匡雅，梅本 康広，大橋 雅也，尾上 元規，梶谷 浩史，亀田 修一，亀山 行雄，
下垣 豪，田中 清美，難波 聖爾，新納 泉，広瀬 和雄，益田 芳樹，正岡 睦夫

(敬称略，50音順)

6. 本報告書の編集は、高橋進一・平井典子が担当した。
7. 出土遺物ならびに図面・写真類は総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）に保管している。



凡 例

1. 本報告書に用いた高度は海拔であり、X・Y軸の値は世界測値系である。方位は磁北である。
2. 本報告書に掲載した遺構・遺物の縮尺は個々に明記した。
3. 本報告書では各遺構の番号及び土器・玉類・金属器などの遺物番号はそれぞれ通し番号とし、挿図・写真図版なども連番とした。
4. 第1図は国土地理院長の承認および助言を得て、同院発行の1/2,500地形図から株式会社パスコが調整した「総社市城図63」を縮小・複製し、加筆したものである。
第2図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/50,000地形図から株式会社パスコが調整した「総社市全図」を拡大・複製し加筆したものである。
5. 径の計測が不可能な土器については、断面図の右側に外面、左側に内面を表示している。
6. 遺物の色調は、「新版標準土色帖（1994年版）」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修）による。

目 次

巻頭図版	
はじめに	
例言	
凡例	
目次	

第1章 地理的歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境	1
第2節 歴史的環境	1

第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査体制	7
第3節 調査の経過	8

第3章 確認調査の概要

T-1	12
T-2	14
T-3	15
T-4	15
T-5・T-6	15
T-7	17
T-8	19
出土遺物	19

第4章 まとめ

21

遺物観察表	
図版	
報告書抄録	

目 次

第1図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/35,000)	2	第10図 T-5・T-6 実測図 (S=1/50)	16
第2図 調査地位置図 (S=1/20,000)	6	第11図 T-2・T-7 実測図 (S=1/50)	16
第3図 一丁塚古墳群・茶臼塚古墳分布図 (S=1/5,000)	9	第12図 T-2・T-7 盗掘の際の石材投棄状況(上)と 石材除去後の状況(下) (S=1/40)	17
第4図 地形測量図 (S=1/800)	10	第13図 T-8 実測図 (S=1/50)	17
第5図 墳丘測量図とトレンチ配置図 (S=1/200)	11	第14図 竪穴式石椁と遺物出土状況 (S=1/20)	18
第6図 T-1 実測図 (S=1/60)	12	第15図 出土鉄器 (S=1/2)	18
第7図 T-2 実測図 (S=1/60)	13	第16図 出土玉類 (S=1/1)	19
第8図 T-3 実測図 (S=1/60)	14	第17図 墳丘から出土した須恵器・埴輪 (S=1/4)	20
第9図 T-4 実測図 (S=1/60)	15	第18図 遺構に伴わない遺物 (S=1/4)	20

表 目 次

第1表 土器観察表	22
第2表 鉄器観察表	22
第3表 玉類観察表	23

図 版 目 次

巻頭図版 1

- ①T-1 及び墳丘の葎石 (西から)
- ②T-3 二段目葎石 (東から)

巻頭図版 2

- ①T-2・T-7 竪穴式石椁検出状況 (北から)
- ②墳丘南西角葎石検出状況 (南西から)

第1図版 一丁塚15号墳調査前の状況 (北西から)	24	第13図版 T-2・T-7 内石椁検出状況 (北から)	28
第2図版 墳丘南西角付近の葎石検出状況 (南西から)	24	第14図版 T-3 全景 (東から)	28
第3図版 墳丘西側葎石検出状況 (西から)	24	第15図版 T-3 葎石検出状況 (東から)	28
第4図版 T-1 内 葎石検出状況 (西から)	25	第16図版 T-4 全景 (南から)	29
第5図版 T-2 掘削開始状況 (南西から)	25	第17図版 T-4 葎石検出状況 (南から)	29
第6図版 T-2 内 石材転落状況 (南から)	25	第18図版 T-4・T-8 葎石検出状況 (南から)	29
第7図版 T-2 竪穴式石椁内石材投棄状況 (西から)	26	第19図版 T-5 墳頂付近 葎石状の石検出 (南から)	30
第8図版 T-2 石椁内投石除去 (西から)	26	第20図版 T-5 墳頂付近 葎石状の石検出 (北から)	30
第9図版 T-2 石椁西壁断面床面付近の赤色顔料 (東から)	26	第21図版 T-6 墳頂付近 葎石状の石検出 (北から)	30
第10図版 石椁内 鉋出土状況	27	第22図版 T-6 墳頂付近 葎石状の石検出 (西から)	31
第11図版 石椁内 玉類出土状況	27	第23図版 出土鉄器	31
第12図版 石椁床面付近の状況	27	第24図版 出土玉類	31

第1章 地理的歴史的環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

一丁丸15号墳は、総社市秦に所在し、正木山山塊から東に派生した丘陵の端部付近に位置する南北に長い低丘陵上に立地する。

岡山県三大河川の一つである高梁川は、吉備高原を侵食しV字谷を造って南流するが、その過程で秦の低丘陵を囲むように西から東へ流れ、そして大きく屈曲して南下する。

南下した高梁川は、吉備高原から連なる山塊が途絶えた総社市南部付近で、一部は東に流れ左岸に広い沖積平野を形成する。

右岸は左岸とは異なり、さらに南に山塊が連なり、山塊の間を東流する新本川が、南下する高梁川に合流する。その過程で、新本川兩岸には狭いながらも平野部が形成される。平野の北側には正木山山塊が、南側には高山山塊、高馬山山塊が、そしてさらに南に下ると高梁川と合流する小田川が東に流れ、その流域にも平野が広がっている。

第2節 歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

高梁川右岸地域の新本川流域周辺では、現在まで旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代の遺跡については、新本字稲井田の長湫遺跡¹から早期の無節縄文土器片が採集されているが、そのほかには久代の板井砂遺跡²が立地する低丘陵上に、後期～晩期と考えられる縄文土器片が数点出土しているにすぎない。遺構に至っては全く確認されていない。

弥生時代

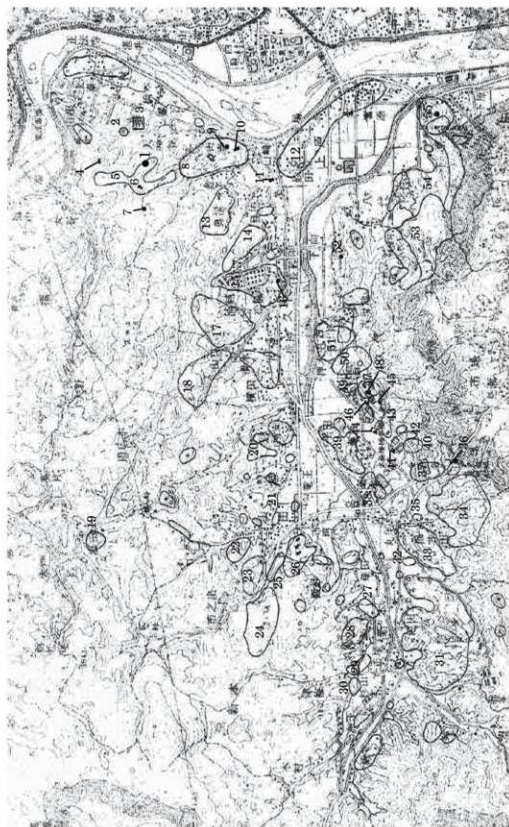
弥生時代に入ると遺跡や遺物の数は増大する。前期の遺跡としては、高梁川に近接する上原遺跡³があげられ、ここではヘルメット状の人面土製品が前期の溝から出土している。そのほか、中期から後期の竪穴住居や建物、土城、袋状土城、柱穴なども確認されている。

弥生時代中期以降には遺跡の数はさらに増大し、新本川左岸段丘上には横寺遺跡⁴、坊ヶ内遺跡⁵、小砂遺跡⁶など、大集落が営まれている。このうち横寺遺跡からは後期前半に属する小銅鐸、家形土製品のほか龍や船などが描かれた絵西土器、文様を施した器台等が出土しており、祭祀が行われた拠点的集落であったと推測される。

新本川右岸では、一倉遺跡⁷や長湫遺跡⁸などが知られており、住居址や土城、溝、柱穴などが多数検出されている。このうち一倉遺跡では、溝内から竪面と考えられる人面絵画を施した後期の小形鉢が出土している。

なお、一倉遺跡、長湫遺跡、そして、山間の谷部に位置する塩田遺跡⁹からは、高梁川の東ではほとんど目にする事のない細い頸部をもつ中期後半の壺形土器が出土しており、これらは備後や伊予で出土する壺形土器に類似する。

以上の集落遺跡のほか、兩岸の低丘陵上には数軒で構成された小規模な集落も営まれている。この



- | | | | | | |
|-------------|-----------------|------------|----------------|----------------|-------------|
| 1. 一丁塚15号墳 | 3. 養閑寺 | 5. 一丁塚古墳群 | 6. 一丁塚1号墳 | 7. 金子石塔塚古墳 | 8. 金子古墳群 |
| 9. 養上沼古墳 | 10. 養大塚古墳 | 12. 茶臼塚古墳 | 13. 奥塚古墳群 | 14. 藤波古墳群 | 15. 長砂2号墳 |
| 17. 浦越古墳群 | 18. 山口古墳群・八平古墳群 | 19. 堀田遺跡 | 20. 狩谷遺跡・狩谷古墳群 | 21. 宮ノ前遺跡 | 22. 松本古墳群 |
| 23. 八瓶古墳群 | 24. 二区跡古墳群 | 26. 砂子山古墳群 | 27. 坊ノ内遺跡 | 28. 回古墳群 | 29. 小砂遺跡 |
| 31. 志部古墳群 | 32. 一倉遺跡 | 33. 丸尾古墳群 | 34. 長瀬遺跡 | 35. 稲井田古墳群 | 36. 立坂古墳群 |
| 39. 藤原北古墳群 | 40. 野宮東平古墳群 | 41. 沖田奥古墳群 | 42. 沖田奥古墳群 | 43. 藤原古墳群 | 44. 藤原割鉄遺跡 |
| 47. 板井砂奥古墳群 | 48. 板井砂奥前遺跡 | 49. 板井砂遺跡 | 50. 黒谷古墳群 | 51. 牛塚古墳群・市後遺跡 | 52. 久代大塚 |
| 54. 砂古墳群 | 55. 伊与郎山墳丘墓 | | | | 53. 八代遺跡 |
| | | | | | 37. 立坂古墳群 |
| | | | | | 38. 高本古墳群 |
| | | | | | 46. 古池奥割鉄遺跡 |

第1図 周辺主要遺跡分布図 (S=1/35,000)

うち狩谷遺跡¹³からは、土器や石廂丁などの石器、鉄器片のほか、土壌墓から類例の少ないガラス製の管玉片が出土している。

また、墳丘墓を中心とした墓域としては、新本川の南約1.3kmの尾根上には、立坂型特殊器台の名祖遺跡となった立坂墳丘墓¹¹が立地する。そのほか、高梁川を見下ろす丘陵上には向木見型特殊器台が出土した伊与部山墳丘墓¹²が築かれているが、伊与部山はそれ自体、ランドマーク的な役割を果たしていたのではないと思われる。

古墳時代

新本川両岸に形成された平野部に面する丘陵上には、数多くの古墳が築かれている。左岸の丘陵上には、東から一丁塚古墳群¹³、金子古墳群¹⁴、奥場古墳群、難波古墳群、長砂古墳群¹⁵、浦越古墳群、ハザ古墳群、山口古墳群、狩谷古墳群¹⁶、松木古墳群、八紘古墳群¹⁷、二反峠古墳群、やや南に砂子山古墳群¹⁸、岡古墳群など小群も含め200基を超える古墳が存在する。

また、南岸の丘陵上にも砂古墳群、八代古墳群、牛塚古墳群¹⁹、黒古墳群²⁰、板井砂古墳群²¹、藤原古墳群²²、沖田奥古墳群²³、野宮東平古墳群²⁴、藤原北古墳群²⁵、高本古墳群²⁶、立坂北古墳群²⁷、稲井田古墳群、丸尾古墳群、恩部古墳群など、一部消滅した古墳も含め総数200基を優に超す古墳が存在していた。

これらの古墳群の中で、秦地城の丘陵上には3世紀後半にまで遡る茶臼嶽古墳（前方後方墳）²⁸、その下方には4世紀初頭の一丁塚1号墳（前方後方墳）²⁹、さらに下方の丘陵先端付近には4世紀前半と考えられる秦大塚古墳（前方後円墳）³⁰など前期の首長墳が連続して築かれている。秦大塚古墳のやや上方には、市内で唯一の三角縁神獸鏡が出土したとされる秦上沼古墳³¹が存在したとされるが、かつて神宮寺の建立によって破壊されたとのことで墳形も定かでない。また、西側の谷を挟んだ丘陵南端には、5世紀末～6世紀初頭と想定される秦茶臼山古墳（前方後円墳）³²も認められる。なお、秦の丘陵には5世紀段階と考えられる方墳・円墳が多数分布し、6世紀段階の横穴式石室をもつ古墳や終末期古墳なども数基認められる。

また、秦の西方に位置する山田の砂子山古墳群では、前方後円墳である砂子山3号墳³³と4号墳³⁴が同一丘陵の頂部付近に築かれている。そのほか、谷を挟んだ西側の丘陵頂部付近にも、一本松3号墳³⁵と名付けられた前方後円墳が確認されている。

このように総社市内の高梁川西部では、上記の首長墳7基が知られている。

このほか特筆すべき古墳としては、新本川左岸において、吉備の首長墳に使用された貝殻石灰岩製の石棺と歩踏の破片が出土した金子石塔塚古墳³⁶があげられるほか、終末期に位置付けられる県内唯一の横口式石棺をもつ長砂2号墳³⁷もこの地に所在する。また狩谷古墳群³⁸の3基の古墳は、10m前後の小規模な古墳でありながら、いずれも多数の外来系玉類（インド・パシフィックビーズや赤く発色させた瑪瑙など）や、中には小環の付いた金環などが副葬されたものもあり、初期須恵器なども出土していることから、渡来系の人々の墓の可能性が考えられる。

新本川右岸においても、県内では類例の少ない貝輪が出土した牛塚1号墳³⁹があげられるが、前方後円・後方墳などの首長墳及び特異な遺構・遺物は新本川左岸に偏在する傾向にある。

集落としては、弥生時代から引き続き横寺遺跡、坊ヶ内遺跡、小砂遺跡、砂子遺跡⁴⁰などで、古墳時代の住居跡が多数発見されている。このうち横寺遺跡からは、縄文文をもつ軟質土器が出土してい

る。また砂子遺跡では、22基の鍛冶炉と土壇状の炭窯45基が検出されている。

なお、新本川の右岸の丘陵上には、製鉄遺跡が分布しており、製鉄炉や製炭窯が多数出土している。遺物を伴わないため時期を決定するのは困難であるが、沖田製鉄遺跡¹⁹のように、古墳との関係から7世紀代を中心に一部6世紀代まで遡るものも存在すると想定されている。

古代

高梁川右岸の小高い台地上に築かれた秦廃寺²²は、回廊や築地の基礎から伽藍は方位に合わせて築かれたと思われ、当該地の地形などからも一町四方の寺域をもつものと想定される。単弁8弁蓮華文軒丸瓦や、礎石の上面に方形の台座を造り中央に径45cm程度の穴を穿った塔心礎が出土していることから、中・四国で最も古い飛鳥時代前半期の寺院址と考えられている。

古墳時代に続き、製鉄も盛んに行われており、藤原製鉄遺跡²³・板井砂製鉄²⁴などは8世紀前後に操業されていたと想定されている。

注

- 1 村上幸雄1987「長瀬遺跡」『総社市史 考古資料編』
- 2 村上幸雄・谷山雅彦・高田明人1991「水島機械金属工業団地協同組合 西園地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9
- 3 松尾洋平2010「上原遺跡発掘調査報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』19
- 4 武田恭彰1994「横谷遺跡 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う調査の概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』3
- 5 武田恭彰1994「横谷遺跡 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査1」『総社市埋蔵文化財調査年報』4
- 6 武田恭彰1994「坊っ内遺跡 新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査2」『総社市埋蔵文化財調査年報』4
- 7 武田恭彰1995「坊っ内遺跡 新本新庄地区ほ場整備事業に伴う発掘調査その2」『総社市埋蔵文化財調査年報』5
- 8 武田恭彰1996「小砂遺跡 新本新庄地区ほ場整備に伴う発掘調査 その6」『総社市埋蔵文化財調査年報』6
- 9 高田明人1987「一倉遺跡」『総社市史 考古資料編』
- 10 谷山雅彦1987「長瀬遺跡」『総社市史 考古資料編』
- 11 谷山雅彦・高田明人1987「塩田遺跡」『総社市史 考古資料編』
- 12 平井典子・高橋進一2018「狩谷遺跡 狩谷古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』28
- 13 近藤義郎1996「新本立坂 立坂型特殊器台名祖遺跡の発掘」『総社市文化振興財団』
- 14 近藤義郎1996「伊与部山墳墓群」『総社市文化振興財団』
- 15 谷山雅彦・高橋進一・村田 晋2014「一丁塚古墳群 市指定史跡古墳確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』23
- 16 中田啓司1987「秦金子古墳群」『総社市史 考古資料編』
- 17 村上幸雄1988「付載1 岡山厚生年金体センター改修に伴う金子古墳群の整備について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』6
- 18 村上幸雄1987「長砂古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』5
- 19 村上幸雄1987「長砂8・10号群」『総社市史 考古資料編』
- 20 註10に同じ
- 21 物部茂樹編2011「八柱古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』233
- 22 武田恭彰2019「樽見1号墳・法正寺1号墳・八柱古墳群 山田地区農業基盤整備事業に伴う発掘調査(1)」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』29
- 23 間諺忠彦1986「総社市山田砂子山古墳群の墳形と石室—その資料と調査経過—」『倉敷考古館研究集報』第19号
- 24 近藤義郎・鎌木義昌「砂子山古墳群」『総社市史 考古資料編』
- 25 村田 晋2017「牛塚古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告書』26
- 26 前角和夫1996「西園地拡張に伴う発掘調査概要報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』6
- 27 註2文献に同じ

- 22 註2 文献に同じ
- 23 註2 文献に同じ
- 24 註2 文献に同じ
- 25 武田恭彰1993「藤原北古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』11
- 26 谷山雅彦1986「高本古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』3
- 27 註2 文献に同じ
- 28 村田 晋2016「茶臼嶽古墳 墳丘確認調査報告書」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』24
- 29 谷山雅彦・高橋進一・村田 晋2014「一丁塚古墳群 市指定史跡古墳確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』23
- 30 高橋進一・村田 晋2014「附載 秦大塚古墳測量調査について」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告書』23
- 31 中田啓司1987「秦上沼古墳」『総社市史 考古資料編』
- 32 中田啓司1987「秦茶臼山古墳」『総社市史 考古資料編』
- 33 註18 文献に同じ
- 34 註18 文献に同じ
- 35 近藤義郎編 2000「前方後円墳集成 補遺編」山川出版社
- 36 鎌木義昌・亀田修一1987「金子石塔塚古墳」『総社市史 考古資料編』
- 37 村上幸雄1987「長砂2号墳」『総社市史 考古資料編』
- 38 註10 文献に同じ
- 39 註19 文献に同じ
- 40 武田恭彰2001「山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査（6）」『総社市埋蔵文化財調査年報』11
- 41 註2 文献に同じ
- 42 葛原克人1987「秦原廃寺」『総社市史 考古資料編』
谷山雅彦1996「秦（秦原）廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』6
谷山雅彦1997「秦（秦原）廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』7
平井典子2017「秦（秦原）廃寺の寺域と伽藍配置について—秦歴史遺産保存協議会の秦廃寺模型作製に係わって—」
『総社市埋蔵文化財調査年報』26
- 43 註2 文献に同じ
- 44 註2 文献に同じ

(平井典子)

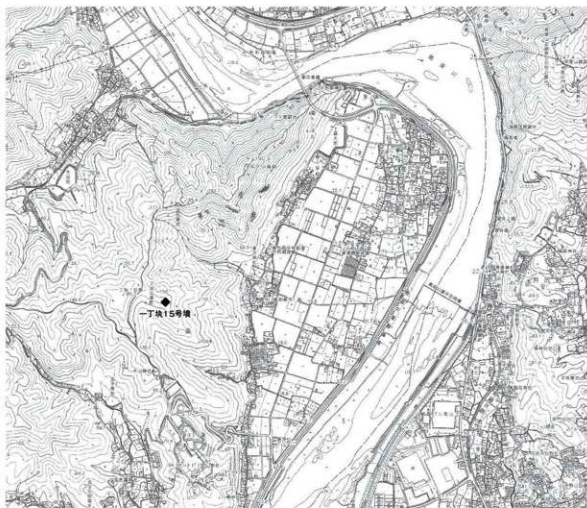
第2章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

総社市秦の丘陵において、2009年から県事業として保安林約7haを対象とした改良事業が実施されることとなった。改良事業自体が土地の形状を大きく改変するものではなかったことと、岡山県遺跡地図にも事業地内の文化財は掲載されていなかったことから、文化財の取り扱いに関する協議はなされなかった。

その後、枯死した松の伐採・除去の後、植林が実施されたが、その時点で前方後方墳が発見され、その周辺にも古墳が点在することが明らかになった。前方後方墳は一丁塊1号墳と命名され、この古墳群の実態を把握するために分布調査を実施した。現在では一丁塊古墳群として約40基の古墳が発見されている。

そのうちの一つである一丁塊15号墳は、他の古墳とは異なり、3辺に礫を垂直に据えた外護列石状の石列がみられる二段築成の方墳で、背面には屏風を広げたような尾根の切断状況がみられたことから、飛鳥期の古墳ではないかとの見解が出されていた。しかし飛鳥期の古墳とするには、他の古墳と



第2図 調査地位置図 (S=1/20,000)

連続的に並んで尾根上に立地しており、風水の思想も取り入れられていなかった。また、大阪府柏原市では、松岳山古墳の前方部前端に接するように茶臼塚古墳が築かれているが、長方形墳とされたこの古墳の墳丘外面は、斜面に据えた葺石ではなく、板石を垂直に積んだ二段築成の墳丘となっている。茶臼塚古墳は、朝鮮半島の積石塚の影響を受けたものと考えられており、副葬品から4世紀代の古墳と位置付けられる。

このように類例はほとんどないものの、飛鳥期以外でも垂直に石積みを実施した墳丘をもつ古墳が存在することから、一丁塚15号墳も、古墳の時期や性格を明らかにする必要があると考えられたため、確認調査を実施することとした。

第2節 調査体制

確認調査は2016年1月18日～6月28日まで実施した。その体制は以下のとおりである。

[2015（平成27）年度]

総社市教育委員会		埋蔵文化財学習の館	
教育長	山中 榮輔	館長	平井 典子
教育次長	矢吹 政行	臨時職員	田中 富子
参事	三村 和久	臨時職員	犬飼 眞弓
文化課長	尾崎 啓一		
課長補佐兼係長	平田 壮太郎		
主査	高橋 進一（調査担当）		
主任	笹田 健一（庶務担当）		
主任	村間 紀子（庶務担当）		
主事	村田 晋（調査担当）		

[2016（平成28）年度]

総社市教育委員会		埋蔵文化財学習の館	
教育長	山中 榮輔	館長	平井 典子
教育次長	服部 浩二	臨時職員	田中 富子
文化課長	河原 隆	臨時職員	犬飼 眞弓
主幹兼係長	平田 壮太郎		
主査	高橋 進一（調査担当）		
主任	笹田 健一（庶務担当）		
主任	村間 紀子（庶務担当）		
主事	村田 晋（調査担当）		

なお、発掘調査作業員として、日々調査に従事してくださいました下記の方々に、記して感謝の意を表します。

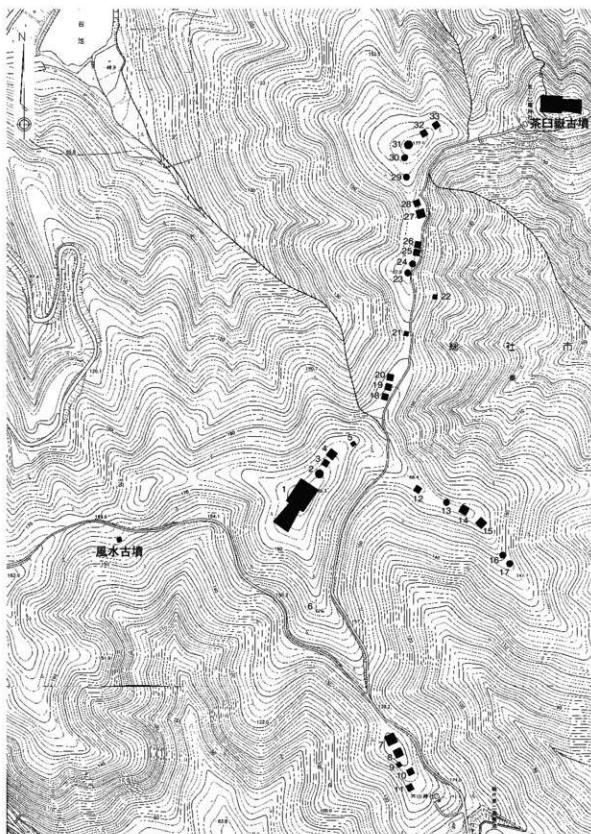
石井 榮、板野 しのぶ、板野 浩子、糸島 三枝子、川端 清治、佐伯 浩子、登森 晶子、羽井佐 友海
(50音順、敬称略)

第3節 調査の経過

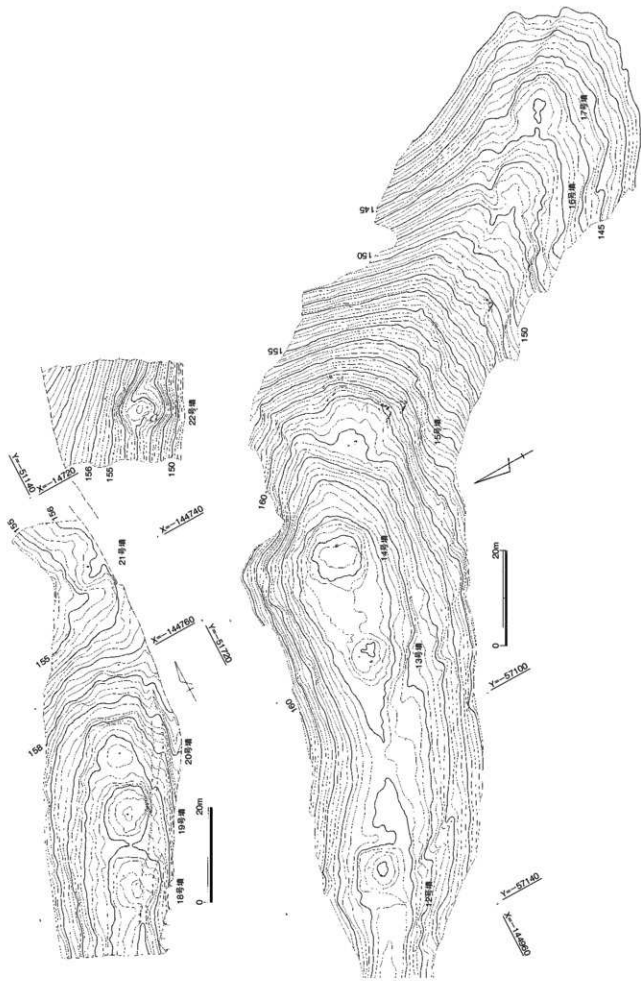
調査は2016年1月18日から開始し、文化課職員高橋進一と村田 晋が調査を担当した。

- 1月18日 杭打ちを行い、トレンチを4か所設定。
- 1月19日 発掘機材を搬入しテント設置。トレンチ掘削開始。
- 1月21日 T-1～3掘り下げ。T-2では僅かな掘削で地山出土。
- 1月26日 T-3で石列検出。
- 1月27日 T-1で石列検出。
- 1月28日 T-4で石列検出。横穴式石室の開口部はないのではとも考えられた。
- 2月1日 T-1内を横切る石列を確認。一段目の葺石と考えられる。
- 2月2日 T-4の石列の状況から、終末期古墳ではない可能性も考えられた。
- 2月4日 T-2を延長し墳丘の上りを確認。T-4で、上の段の葺石（列石状）を検出。
- 2月10日 T-2を南に延長。
- 2月12日 T-2の南半で南北に石列出土。竪穴式石槨か？
- 2月16日 T-3で二段目の石列検出。
- 2月24日 T-2南端付近の石は閉塞石の可能性も考えていたが、盗掘坑に投棄された石の可能性が高くなった。
- 3月2日 石槨の側壁を探すために、主軸に直交するT-5・6を設定し掘り下げ開始。
T-5からは墳丘盛土が、T-6からは側壁ラインと思われる石列を検出。
- 3月8日 T-2内で石室奥壁ラインを追っていく。
- 3月9日 岡山県文化財保護審議会視察。
石槨規模の確認のためT-2を一部拡張。盗掘坑内の土除去開始。
- 3月23日 石槨の南東角を確認。
- 4月11日 石槨内から勾玉・管玉・ガラス小玉出土。礎床直上に赤色顔料分布。
玉類から5世紀代と考えられ、竪穴式石槨であることが確実となった。
- 4月13日 石槨内から鉈出土。
- 4月14日 石槨内敷石直上に赤色顔料を含んだ粘土層が堆積。盗掘坑はその直上で止まる。
- 4月19日～ 石槨の西壁確認のため、T-7を設定し、掘り下げ開始。
T-7内で石槨の北壁も確認。
- 4月20日～ T-4の西にT-8を設定し、石列の並びを確認。
- 5月11日～ T-7内で石槨の小口を確認。
墓坑の掘方を確認するため、T-2内にサブトレを設定。
- 5月12日 T-7内で墓坑の掘方確認。
- 5月29日 現地説明会
- 6月13日 総社市文化財保護審議会委員視察。
- 6月14日 遺構の実測や写真撮影がほぼ終了し、埋め戻しを開始。
- 6月27日 6月16日～26日まで他の仕事に従事したため、27日から石室内の水を抜き、不織布を敷いた後、埋め戻しを完了した。

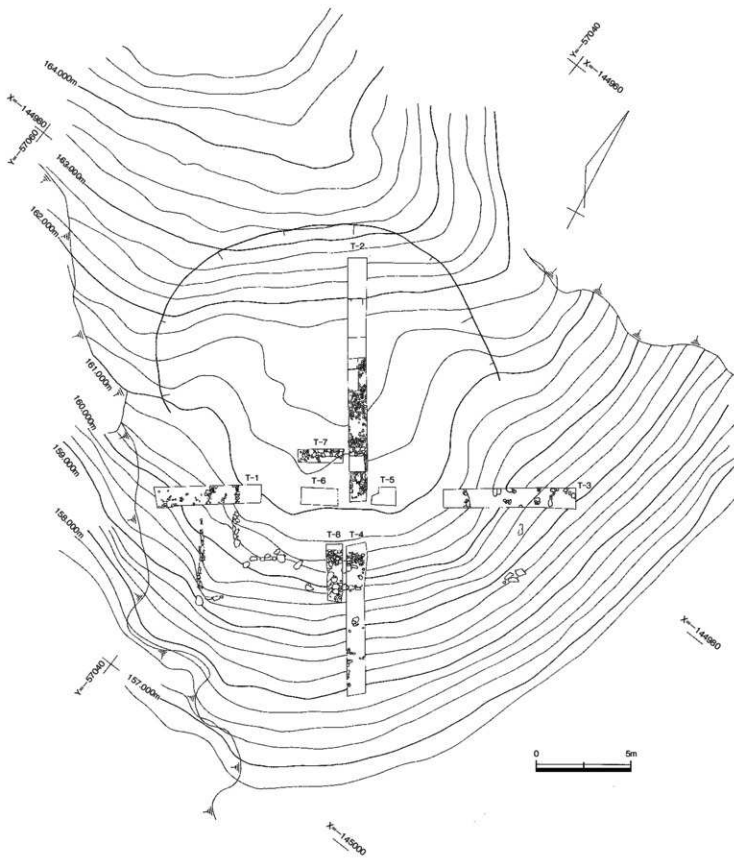
(平井)



第3圖 一丁塚古墳群・茶臼嶽古墳分布圖 (S=1/5,000)



第4图 地形測量図 (S=1/800)



第5図 填丘測量図とトレンチ配置図 (S=1/200)

第3章 確認調査の概要

一丁坑古墳群は現在までに1～38号墳と、茶臼嶽古墳・風水古墳を加えた合計40基の古墳が確認されている。このうち一丁坑15号墳は、主要な古墳が分布している南北方向の尾根線から東に派生する丘陵の尾根上に築かれている。この尾根線上で確認されている古墳は6基であり、円墳と方墳が3基ずつである。

一丁坑15号墳は、南東方向に緩やかに下る尾根稜線を大きく掘り割って周溝を作り、墳丘が築かれている。墳丘は一辺15m程度の方角を呈しており、墳丘の南西角付近に二段の石列が認められ、葺石か外護列石であると推定された。これにより少なくとも二段の段築があることが伺われた。

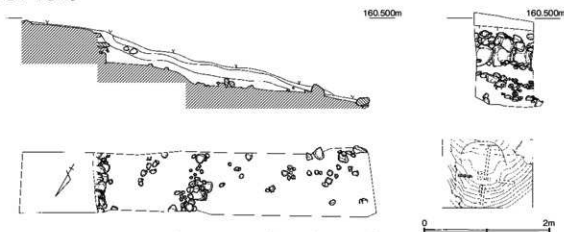
トレンチは、推定される墳丘の中心部を残して、東西南北方向に十字形に設定した。主要な十字方向のトレンチを墳端と外表施設を確認するために設定し、補完的なトレンチを含め、設定した順に1～8までの番号を付けている。

T-1～4は、墳端と外表施設を確認するために設定し、墳頂部の状況を見るためにT-5・6を設定した。またT-2で検出された竪穴式石櫛の規模を確認するため、南にT-2を拡張し、西側にT-7を設定した。最後にT-4で検出された墳丘の二段築成と葺石の並びの状況を確認するためにT-8を設定した。

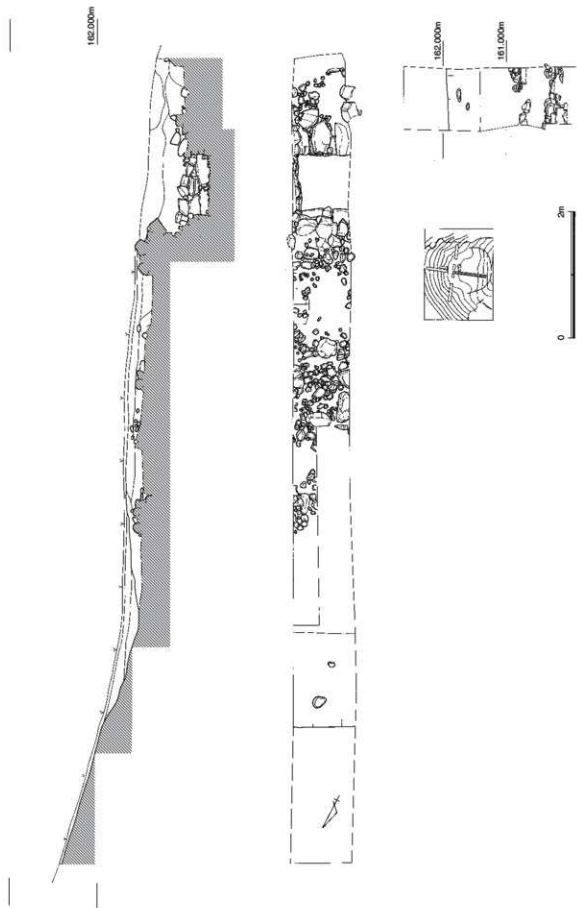
以下に概要を記している。

【T-1】

墳丘の西端を確認するために設定した。トレンチの東端から西へ約1.5m付近で、石垣状の石組みが出土し、その西側に多くの礫石が検出された。この石組は当初、終末期古墳の外護列石ではないかと考えたが、後に古墳の時期が古墳時代中期であることが判明したため、二段築成の方墳の上段と判断できた。この上段墳丘の葺石は三段程度が残存しており、基底石である一段目には大きな石が使用されていた。その西側から出土した礫石は、他のトレンチの状況から下段の墳丘の葺石が流出したものと判断された。こうした状況のなか墳端は、基盤層の傾斜変化と流出した葺石の転落状況から想定することができた。



第6図 T-1実測図 (S=1/60)



第7图 T-2 平面图 (S=1/60)

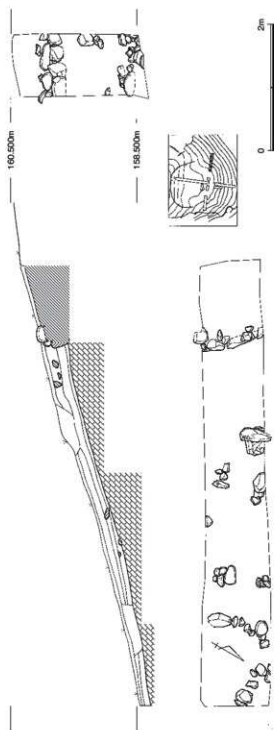
【T-2】

墳丘の北端を確認するために設定し、のちに南に延長した。延長したトレンチの南端付近から転石礫が集中して検出され、精査したところ破壊された竪穴式石槨が発見された。石槨は上半分が破壊され、蓋石も残存していなかった。石槨の側壁は一番下の基底石から四～六段程度残存していたが、上端は完全に破壊されており、遊離した石槨石材が石槨内に投入されていた。このような状況から一丁塊15号墳は盗掘に遭い、石槨の上半がほぼ完全に破壊され、遊離した石槨石材が盗掘域内に再投入されていることが判明した（第12図）。

盗掘によって投棄された石材を取り上げていったところ、盗掘は竪穴式石槨の床面近くまで達していることが判明した。盗掘域をさらえた結果、石槨床面には板石が施設されており、その上に小円礫が敷かれていたことが判明した（第14図 竪穴式石槨と遺物出土状況（S=1/20））。また、盗掘域を再掘し始めた当初は分からなかったが、この盗掘域は石槨床面に敷かれている板石の2～3cm上までで止まっている部分があり、この板石の上には2～3cm程度の厚さの細粒の粘土に覆われている場所があることが判明した。この粘土は盗掘以前に、石槨石材の間隙から滲出して堆積したものと推定された。

この盗掘を免れた自然流入粘土の中から鉄製の鈍2と茎の破片2、滑石製の小勾玉4・碧玉製管玉5・ガラス小玉15の玉類が出土している（第15・16図 出土遺物（S=1/2・1/1））。この自然流入粘土の大部分は、そのまま保護し埋め戻して保存している。

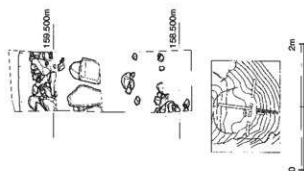
また墳丘北側（自然丘陵側）に位置する墳端については、墳丘南側（斜面側）のような明瞭な墳端を示す葺石や周溝の上りが認められなかった。しかしながらトレンチ内で検出された葺石の北端付近が周溝の端にあると判断された。このような状況から墳端を捉えることができた。



第8図 T-3実測図 (S=1/60)

【T-3】

墳丘の東端を確認するために設定した。トレンチの西端から東へ約1.3m付近で上段墳丘（二段目）の葺石が検出された。この上段墳丘の葺石はT-1とほぼ同じような状況であり、石垣状に組み込まれた葺石が二～三段残存していた。下段墳丘（一段目）の葺石は流出しており、墳端の地山地形の変化についても明瞭な痕跡が残っていなかったため不詳であるが、墳丘の南東角付近に露出している葺石から墳丘南東角を捉えることができ、墳丘規模を推定することができた。現在、上段墳丘の葺石の下方約1.5m地点あたりに残る大きめの葺石は、墳丘下段の痕跡と考えられる。



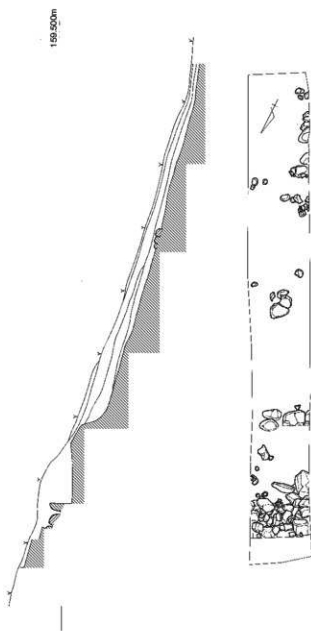
【T-4】

墳丘の南端を確認するために設定した。このトレンチでは最も良好に葺石が残存しており、二段築成の上・下段の葺石の状況が明瞭に確認できた。一段目・二段目ともに端部に葺石が据え立てられていた。一段目の最外郭線の墳端には大きな葺石が立て並べられるように配置されており、その背後は一段高くなって二段目墳丘の法尻までテラス状になっている。

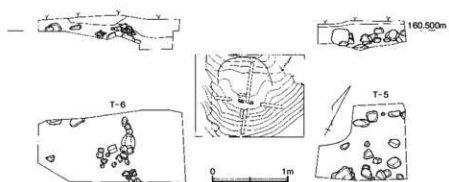
トレンチの南半はゆるやかな斜面になって下がっており、礫石が多く検出された。この周辺は墳丘南端の外側にあっており、古墳の墳端より外側（下側）には、葺石が多く転落している状況であった。

【T-5・T-6】

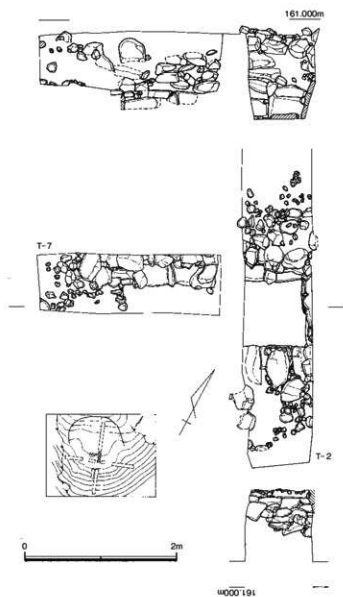
墳頂部の状況を明らかにするために設定した。表土を除去するとすぐに明黄褐色土層になり、その上面には礫石が認められた。この礫石は流出した葺石と考えられ、葺石としての原位置を保ってはいないと判断された。またこの明黄褐色土は、墳丘盛土の最上部（墳丘表面）にあたると思われた。



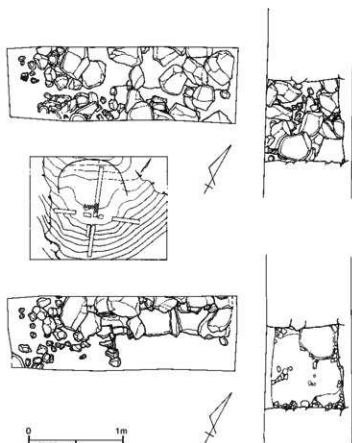
第9図 T-4実測図 (S=1/60)



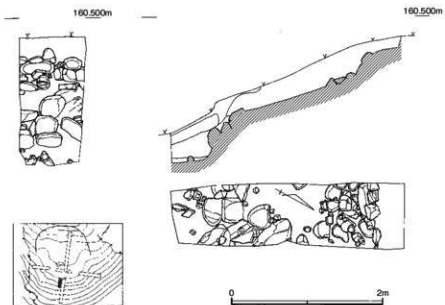
第10图 T-5 · T-6 实测图 (S=1/50)



第11图 T-2 · T-7 实测图 (S=1/50)



第12図 T-2・T-7盗掘の際の石材投棄状況（上）と石材除去後の状況（下）（S=1/40）

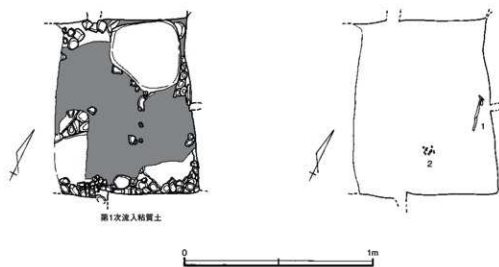


第13図 T-8実測図（S=1/50）

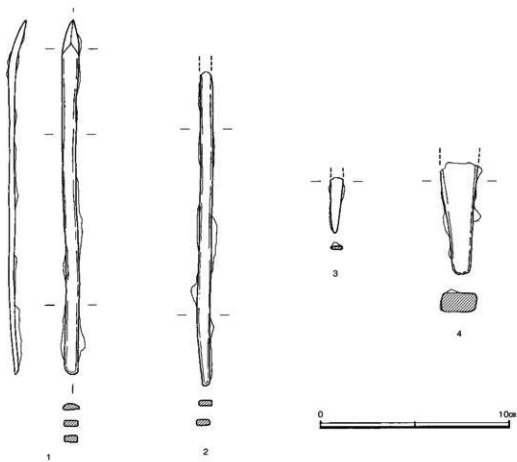
【T-7】

石櫓の東西方向の長さや広がりをはっきりさせるために設定した。T-2で検出した石室とほぼ同じ状況で、盗掘によって天井石は全てなくなっており、動かされた石櫓石材は石櫓内に再投棄されてい

た(第11図)。投棄された石槨石材を除去していったところ竪穴式石槨が検出されたが、T-2の状況と同じく、側壁の石材は二～六段程度までしか残存していなかった。しかしながら、竪穴式石槨の規模が明らかになり、その規模は内法で0.9×2.35mであった。また石槨側壁は石槨短辺東壁にくらべ若干内傾して狭くなっていることから、東頭位と推定される。



第14図 竪穴式石槨と遺物出土状況 (S=1/20)



第15図 出土鉄器 (S=1/2)

【T-8】

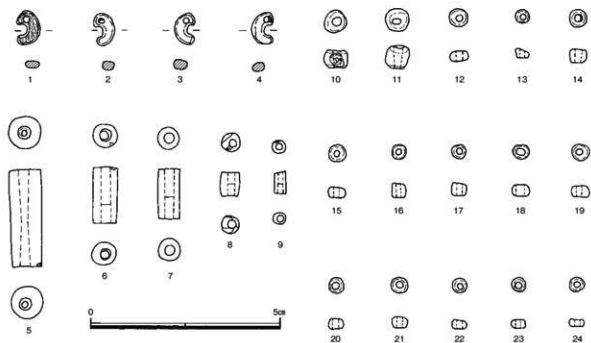
T-4で検出した墳丘と葺石の続きの状況を見るために設定した。その結果、T-4と同様に残りが良く一段目の段築と葺石から二段目までのテラスそして二段目の葺石へと続いて行くことが明らかになった。流出していると推定される葺石も多く地形斜面の下方へ転落していたが、比較的明瞭に原位置の葺石も検出され、築造時の状況が確認できた。

以上の結果から、一丁坊15号墳の墳丘は、東西に細長い長方形を呈する二段築成で、東西17m、南北12mの規模であることが判明した。墳丘の正面側である南側は葺石も段築成もしっかり築かれており、墳端は明瞭であった。しかしながら、墳丘背面側である北側では明瞭な周溝の上りが認められず、墳端は葺石の分布で捉えることになった。

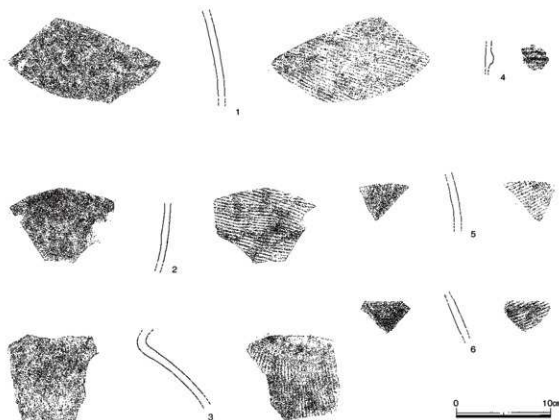
【出土遺物】

竪穴式石槨内から鉄器（鉋2・茎破片2 第15図1・2・3・4）と玉類（勾玉4・管玉5・ガラス小玉15 第16図1～4・5～9・10～24）が出土している。鉋（1・2）のうち1は、ほぼ完形であるが、2は刃部が欠損している。3・4は茎の破片である。茎の器種は不明であるが、第15図3は鉋の茎である可能性もある。鉋の機能は平面を削り整えることであり、用途によって刃部の形態・長さに変化が生じている。ここでは古瀬清秀氏の分類に従って分類することにする¹。この分類によれば1の鉋は幅狭の短い刃部をもち、同じ幅の長い茎部が付いており、弥生時代後期から古墳時代を通して存在する。

玉類のうち勾玉（1～4）は白灰色の滑石製で、比較的いいいな作りと研磨が施されている。管玉（5～9）は、濃緑色硬質の碧玉製のもの（5）と（淡）灰緑色硬質の緑色凝灰岩製のもの（6～9）がある。緑色凝灰岩製の管玉のうち、6・7には縞状の石の目が認められる。すべての管玉の表



第16図 出土玉類 (S=1/1)



第17図 墳丘から出土した須恵器・埴輪 (S=1/4)



第18図 遺構に伴わない遺物 (S=1/4)

面は、丁寧に研磨されている。

管玉は製作された年代によって、使用される石材や形態が変化していく²。6～9の淡灰緑色硬質のものは、5世紀代の管玉計測値の分布範囲内にある。濃緑色硬質の碧玉製管玉5も、他の碧玉製管玉と同様に両面穿孔されている。また滑石製勾玉は、滑石製品としては丁寧な作りで、石製模造品ではなく石製品に分類できると考えられる。なお、ガラス小玉はすべて管切法によって製作されている。

土器と埴輪はいずれも墳丘及びその付近からの表採品である。須恵器は内面に青海波やナデを施すものがみられ、時期幅があることから、古墳の時期を決定する資料とはならなかった。

以上、玉類から見ると、一丁塚15号墳は5世紀中葉頃に築造された古墳と推定される。

(高橋進一)

註

1. 古瀬清秀1977「古墳出土の施の形態的変遷とその役割」『考古論集』慶祝松崎寿和先生六十三歳記念論文集
2. 高橋進一1992「玉作遺跡と玉製品」『古備の考古学的研究』山陽新聞社

第4章 まとめ

一丁块15号墳は、墳丘斜面に葺石を葺く一般的な古墳とは異なり、二段築成の墳丘に垂直に積んだ石列が巡る特異な形態をもつ。石列は最下段のものが大きく、上部は人頭程度である。一見終末期古墳と見紛うような造りであるが、主体部は竪穴式石槨で石槨内から出土した玉類からも概ね5世紀代に築かれた古墳であることが判明した。

終末期古墳以外でこのような形態をもつ5世紀代の古墳は、県内では類例がなく、他地域でもほとんど知られていない。僅かに大阪府柏原市に所在する前方後円墳：松岳山古墳の前方部前端に接するように築かれた茶臼塚古墳¹があげられる。この古墳は一部破壊されているが、東西16m、南北22mの長方形墳と推定されており、板石を垂直に積んだ二段築成の墳丘をもつことから、朝鮮半島の影響が考えられている。

茶臼塚古墳は板石積みで、一丁块15号墳は礫石積みであるが、いずれも垂直に積んだ石列をもち、階段状に二段に築成されていることから、一丁块15号墳も朝鮮半島の影響を受けて築かれた可能性が高い。

また、一丁块15号墳は、T-5・6など墳丘最上段に位置するトレンチ内から、墳丘面に接して礫が認められる(第19～21図版)。T-2の上方で、墳丘の端部が確認された付近には、礫はほとんど見られないことから、尾根の上方から転落してきたとは考えにくい。当初から礫が敷かれていた可能性は高いが、墳丘上面に礫が葺かれた古墳は他では見受けられない。

以上のように、垂直に二段に立ち上がる葺石、最上段に面的に広がっている礫など、5世紀代の日本の古墳には見られない形態である。

高梁川右岸に位置する総社市山田の狩谷古墳群²では、土取りに伴う発掘調査によって、4基の古墳が発見され、そのうちの1号墳・3号墳・4号墳からは多くの装飾品が出土している。1号墳は後世の開発で墳丘は残っていなかったが、埋葬施設には多数の玉類が副葬され、赤く発色させた瑪瑙や黄色のガラス小玉と瑪瑙の丸玉・鈴を金具でつないだと思われるブローチ状の装飾品も検出された。

また、3号墳は、径8.5mの小規模な円墳であるが、主体部からは大量の玉類とともに、鉄器類や、小環の付いた耳環も出土している。墳丘からは初期須恵器も出土しており、中には重なるものも含まれていることから、貴重な品として遠くから運ばれたというよりは、近隣で焼成された可能性が高い。

4号墳も一辺6m程度の小規模な古墳ながら、埋葬施設からは、インド・パシフィックビーズであるムティ・サラが大量に出土している。

このように高梁川右岸では、高梁川左岸の吉備中枢地では目にすることのない、特殊な副葬品をもつ小規模な古墳がいくつかみられることから、渡来人がこの地に多く居住していた可能性が考えられ、一丁块15号墳の特異な墳形も、朝鮮半島の積石塚の影響を受けた可能性が高いと推測される。

(平井・高橋)

註

1. 2009「茶臼塚古墳」〔松岳山古墳群を探る〕柏原市立歴史資料館
2. 平井典子・高橋進一2018「狩谷遺跡 狩谷古墳群」〔総社市埋蔵文化財発掘調査報告〕28

第1表 土器観察表

番号	遺構・土層名	種別	器種	色調	備考
1	一丁坑15号墳墳丘表土	須恵器	甕	外：N7/ (灰白) 内：2.5Y5/1 (黄灰)	外：平行タタキ 内：青海波
2	一丁坑15号墳墳丘表土	須恵器	甕	外：N7/ (灰白) 内：2.5Y5/1 (黄灰)	外：平行タタキ 内：ナデ
3	一丁坑15号墳墳丘表土	須恵器	甕	外：2.5Y5/1 (黄灰) 内：2.5Y5/1 (黄灰)	外：平行タタキ 内：青海波
4	一丁坑15号墳墳丘表土	埴輪	円筒埴輪	外：2.5Y7/2 (灰黄) 内：2.5Y 7/1 (灰白)	
5	一丁坑15号墳墳丘表土	須恵器	甕	外：N7/ (灰白) 内：N5/ (灰)	外：平行タタキ 内：ナデ
6	一丁坑15号墳墳丘表土	須恵器	甕	外：N5/ (灰) 内：N6/ (灰)	外：平行タタキ 内：青海波
7	遺構に伴わない遺物	須恵器	壺	外：2.5Y7/2 (灰黄) 内：2.5Y 7/1 (灰白)	
8	遺構に伴わない遺物	弥生土器	壺	外：2.5Y6/1 (黄灰) 内：10YR8/2 (灰白)	
9	遺構に伴わない遺物	弥生土器	甕	外：7.5YR7/4 (にぶい橙) 内：7.5YR 7/6 (橙)	
10	遺構に伴わない遺物	弥生土器	高坏	外：2.5Y8/4 (淡黄) 内：10YR 7/6 (明黄褐)	

第2表 鉄器観察表

番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
1	鉈	18.7	0.8	0.35	完形品
2	鉈	16.5+ α	0.7	0.3	刃部を欠損
3	茎	2.9+ α	0.8	0.18	茎の先端
4	茎	5.8+ α	1.8	1	茎の先端

第3表 玉類観察表

番号	種類	長 (mm)	径・幅 (mm)	厚 (mm)	質量 (g)	開孔径	孔末径	材質	色調	備考
1	勾玉	8.9	5.8	2	0.14	1.5	1.4	滑石	白灰色	逆C字形
2	勾玉	8.4	5.4	2.2	0.13	1.6	1.5	滑石	灰白色	逆C字形
3	勾玉	8.1	5.3	2.3	0.13	1.6	1.6	滑石	灰白色	C字形
4	勾玉	8.25	5.5	2.1	0.12	1.6	1.5	滑石	白灰色	C字形
5	管玉	25.5	8.3		3.23	3.4	3	碧玉	濃緑色 (縞状の石目あり)	硬質 両面穿孔
6	管玉	14.5	6.3		0.8	2.9	2.8	緑色凝灰岩	淡灰緑色 (縞状の石目あり)	硬質 両面穿孔
7	管玉	13	5.7		0.61	2.6	2.5	緑色凝灰岩	淡灰緑色 (縞状の石目あり)	硬質 両面穿孔
8	管玉	6.3	4.9		0.21	2.3	2.2	緑色凝灰岩	淡緑青灰色	硬質 両面穿孔
9	管玉	5.8	3.2		0.08	1.6	1.6	緑色凝灰岩	淡灰緑色	硬質 両面穿孔
10	ガラス小玉	5	6		0.23	2.3		ガラス	濃紺色半透明	管切法による製作 小口研磨 打痕状 の欠損あり
11	ガラス小玉	6	6.3		0.29	1.8		ガラス	濃紺色半透明	管切法による製作 小口研磨
12	ガラス小玉	2.8	5.2		0.09	1.7		ガラス	暗青色半透明	管切法による製作
13	ガラス小玉	2.3	3.6		0.01	1.6		ガラス	暗青色半透明	管切法による製作
14	ガラス小玉	3.2	4.75		0.09	2		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
15	ガラス小玉	2.7	4.4		0.07	1.5		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
16	ガラス小玉	3.6	3.9		0.07	1.5		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
17	ガラス小玉	3.1	3.9		0.06	1.5		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
18	ガラス小玉	3.1	4.9		0.06	2		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
19	ガラス小玉	3.2	4.5		0.07	2		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
20	ガラス小玉	2.8	3.8		0.05	1.9		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作
21	ガラス小玉	2	4.4		0.06	2.1		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
22	ガラス小玉	2.5	3.8		0.03	1.7		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
23	ガラス小玉	2.4	3.7		0.03	1.7		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨
24	ガラス小玉	2.1	3.9		0.03	1.7		ガラス	淡青色半透明	管切法による製作 小口研磨

第1図版
一丁坑15号墳調査前の
状況（北西から）



第2図版
墳丘南西角付近の葺石
検出状況（南西から）



第3図版
墳丘西側葺石検出状況
（西から）



第4図版
T-1内 墓石検出状況
(西から)



第5図版
T-2 掘削開始状況
(南西から)



第6図版
T-2内 石材転落状況
(南から)



第7図版
T-2 竪穴式石櫛内
石材投棄状況 (西から)



第8図版
T-2 石櫛内投石除去
(西から)



第9図版
T-2 石櫛西壁断面
床面付近の赤色顔料 (東から)



第10図版
石柵内 鉋出土状況



第11図版
石柵内 玉類出土状況



第12図版
石柵床面付近の状況



第13図版
T-2・T-7内
石柵検出状況（北から）



第14図版
T-3全景（東から）



第15図版
T-3葺石検出状況
（東から）



第16図版
T-4 全景 (南から)



第17図版
T-4 葺石検出状況
(南から)



第18図版
T-4・T-8 葺石
検出状況 (南から)



第19図版
T-5 墳頂付近
葺石状の石検出 (南から)



第20図版
T-5 墳頂付近
葺石状の石検出 (北から)



第21図版
T-6 墳頂付近
葺石状の石検出 (北から)



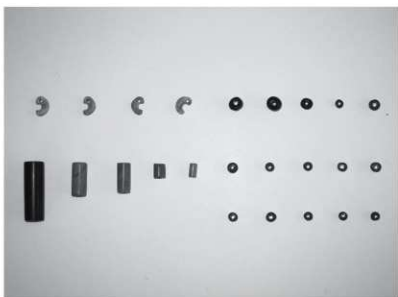
第22図版
T-6墳頂付近
墓石状の石検出（西から）



第23図版
出土鉄器



第24図版
出土玉類



報告書抄録

ふりがな	いっちょうぐるじゅうごごうふんかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	一丁塊15号墳確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	31							
編著者名	高橋進一、平井典子							
編集機関	岡山県総社市観光プロジェクト課文化係							
所在地	〒719-1163 岡山県総社市地頭片山17-1 TEL0866-92-8363							
発行年月日	2023年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	緯 跡 番号	北緯 °'〃	東経 °'〃	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
いっちょうくわい 一丁塊15号墳	岡山県 総社市泰 字一丁塊	33-208	298	34 41 31	133 42 30	2016年 1月18日 ～6月28日	約44㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
一丁塊15号墳	古墳	古墳時代	方墳、 竪穴式石椁	鈿、茶、勾玉、管玉、 ガラス小玉、埴輪片、 須恵器片		一丁塊15号墳は方墳の三方を 垂直に立ち上がる礎石積みで囲 み、一見終末期古墳の様相を呈 するが、埋葬施設は竪穴式石椁 で、玉類も5世紀段階と考えら れる。		
要約	高梁川右岸の低丘陵上に築かれた一丁塊古墳群の一つ。古墳群は古墳時代前期から終末期まで存続し、約40基の古墳からなる。前期には、前方後方墳が2基築かれている。今回調査を行った一丁塊15号墳は方墳で、三方が垂直に立ち上がる礎石積みの特異な古墳である。一見終末期古墳の様相を呈するが、風水の思想を取り入れた立地ではなく、前後の古墳とともに尾根上に並ぶ、また埋葬施設は竪穴式石椁で、副葬品の玉も5世紀代と考えられる。大阪府柏原市松岳山古墳の前方部前端付近に築かれた茶臼塚古墳の墳丘も、板石積みではあるが垂直に積まれており、一丁塊15号墳との類似が目玉される。							

総社市埋蔵文化財発掘調査報告31

一丁 15号墳

令和5（2023）年3月31日 印刷

令和5（2023）年3月31日 発行

編集発行 岡山県総社市
岡山県総社市中央一丁目1番1号

印刷 サンコー印刷株式会社
岡山県総社市駅南一丁目1番地5